

クリスマスと中国人 1

遊佐 徹

1、1988年、北京のクリスマス

天安門広場の南端から西に進み、かつて北京が城壁を廻らせた都市であったことを思い出させる地名のひとつである宣武門の交差点で立ちどまって、しばしあたりをながめ渡すと、周囲の風景とは明らかにたたずまいを異にする灰色の建築物に目が留まることだろう。その南向きのファザードの形状と装飾がとても印象的な建物とは、通称「南堂」と呼ばれている（宣武門天主堂、聖母無染原罪堂）北京で最も古いカトリック教堂——1650年、イエズス会宣教師、アダム・シャルルによって創建。現在のものは数度に渡る焼失、破壊を経たのちの1904年に再建されたもの——である¹。

1988年の12月24日、すなわちクリスマスイブの日、当時、北京での留学生生活を始めて3ヶ月余りを経過していた私は、夕暮れ時を見計らってかねてより何度もその前だけは通り過ぎていた南堂を訪問してみた。それは、そこへ行けば「クリスマス」が祝われているだろうと期待してのことであった。

日本的な意味での年の瀬の雰囲気は全く感じられない北京の街角に、クリスチャンでもない私がクリスマスの存在を捜し求めたのには、異国で年末を迎える寂しさを紛らわそうということ以外にある積極的な理由があった。その理由とは、88年を遡る7年前の真夏、初めて訪れた北京で見た奇妙な光景の記憶に基づいたものだった。

8月の強い日差しの中なかで商店の軒先にぶら下げられたサンタクロースの人形。そしてエンドレスで響き渡るジングルベルの軽快なメロディー。

文化大革命が終息してからまだそれ程年月を経していない中国において、宗教行事としてのそれはいざ知らず²、大衆文化的クリスマス、すなわち日本的なクリスマスが存在するはずはないだろうことはその時の私にも容易に想像できた。だとしたら、この真夏のサンタクロースとジングルベルは何なのか。長きに及んだ世界との隔絶状況からの脱出の象徴物のひとつなのか。そもそも文革発動以前の共産党政権下の中国においてクリスマスは存在し得たのか。さらにそれに先立つ中華民国期、そして中国が西洋世界と向き合うことを余儀なくされた清朝末期における中国人とクリスマスの関係はどのようなものであったのだろうか……等々、1981年の夏のある日、北京の街角で一瞬脳裏に浮かんだクリスマスを巡るいくつかの疑問が、それから7年後のクリスマスイブに私の足を南堂に向けさせたのであった。

88年12月の北京は、ホテル、留学生宿舎、外国人用公寓、外国企業オフィス等の外国人が寄り集い、生活するごく限られたエリアを除けば、クリスマスとは縁もゆかりも無いといった表情を湛えていた。したがって、私が南堂に足を運んだのは、そこへ行けば、中国人や中国社会におけるクリスマスの宗教的位置付け、ひいては中国におけるキリスト教

信仰の現状を知ることができるかもしれないと考えてのことだった。

宣武門東大街と南堂を仕切る灰色の塀に造り込まれた中国風の門の前には、すでに 20 人弱の中国人達が集まり、固く閉ざされた門扉を叩くなどしていた。どうやら彼等もクリスマスに「探し」に来たらしかった。しかしいくら経っても赤い門扉は開く気配を見せない。足元を侵していた冷気が身体の中芯に達しそうになるまで待って、中国人のなかにもクリスマスに興味、関心を持つ人達がいたということを知り、帰途に就こうとした矢先、饅頭の買出し（つまり、晩御飯の買出し）から戻ってきた関係者の呼び掛けに応じて、扉が開いたのである。私は中国人の集団に押し込まれるようにしてなかに入った。そこには、ささやかに飾り付けを施されたマリア像が初めてそのファザードの全貌を仰ぎ見ることの許された聖堂の傍らに立ち、告知用の黒板には色とりどりのチョークで「聖誕弥撒（クリスマスミサ）」のスケジュールが記載されていた。北京にも宗教儀式としてのクリスマスは厳然として存在していたのである。

2、2006 年、北京のクリスマス

さて、北京、宣武門の南堂にクリスマスを探し求めてから 20 年後、私がこうして改めてクリスマスと中国人、中国社会の関係について一文を草しようと思いついたのは、それ相当の新たな理由があつたのである。

それは、5 年前のやはり北京におけるクリスマスの経験によって、両者の関係についてさらなる疑問が生じたためである。

北京空港のイミグレーションの外で、たまたま出張の日程がクリスマス時期と重なった私を出迎えてくれたのは、巨大なサンタクロースの人形であった。到着ロビーにもこれまた巨大なクリスマスツリーが立ち、サンタクロースの赤い帽子を被った中国人が徘徊している。ホテルに着けば、同時期の日本と変わらぬ飾り付けに「聖誕套餐（クリスマスセットディナー）」の予約を募るポスター。ベルボーイは、イブとクリスマス当日の夜は、どのホテルのレストランもディナーの予約客で一杯になるので、宿泊客は食事場所を探すのに苦労することになるという。なんでも、クリスマスは中国人のカップルや家族連れが豪華ホテルディナーを囲む日なのだそう。

この段階で、すでに 88 年の北京の年末とは随分様相を異にしていることが感じられたが、その感覚の正しさが確認されるのにさして時間は掛からなかった。市中に出ると、クリスマスらしいデザインとイルミネーションが繁華街を埋め尽くしており、それらに掻き立てられたかのような消費欲の熱気にたちまちのうちに圧倒されたのである。

中国語ではクリスマスのことを「聖誕節」と書く。したがって、ホテルやデパート、ショッピングセンターなどのロビーホールのみならずオフィスや家庭にごく当たり前に飾られるようになったクリスマスツリーは「聖誕樹」で、子供達が待ちわびるサンタクロースは「聖誕老人」、その「聖誕老人」が届けるクリスマスプレゼントは「聖誕礼物」で、家族や親しい人達と囲む食卓に載るクリスマスケーキは「聖誕蛋糕」となる。この他にも、クリスマスカード＝「聖誕卡」、クリスマスパーティー＝「聖誕晚会」、クリスマスディナー＝

「聖誕大餐」等々、市中で目に付き、また耳にした用語の面からだけでも、すでにクリスマスが、少なくとも中国の大都市においてはすっかり年中行事として定着してしまっていることをその時の私は知ることになったのである（その後、クリスマスイブのことは「平安夜」と表現するというのも文学作品から知った）。

このようにクリスマスが中国人達の間にも広まるようになったのは何時からのことだったのだろうか。その普及は中国人の意識や中国社会の状況の変化とどのように関連したものなのだろうか。また、クリスマスの普及が逆に中国人の意識や中国社会のありようにインパクトを与えるようなことはなかったのだろうか。これら改革開放政策の実施から4半世紀以上の歳月を経た北京でクリスマスを再び経験することになった私の脳裏に浮かんだいくつかの疑問が、この一文に着手する決意を呼び起こしたのである。

3、日本人、日本社会とクリスマス

中国人とクリスマスとの関係、とりわけこの30年程の間の中国人、中国社会におけるクリスマスの位置付けの変化や受容・定着の実際を押さえ、研究してゆく作業を始めるに際して、私はひとつの参照系の存在を意識していた。それは、先例としての日本人、日本社会におけるクリスマスの受容と定着、特に戦後におけるその経緯である。ともにキリスト教世界に属しているわけでもない両国において、これ程までにクリスマスが受け容れられることになった重要な要因のひとつとして、商業主義文化、消費主義文化の浸透に基づくその大衆化、土着化を考えることができるだろうというのがその理由であった。

もちろん、日本においてクリスマスが祝われるようになったのは、決して戦後を待ってのことではない。日本人、日本社会とクリスマスとの関係を丹念に調べ上げ、文化史研究の立場に立って論述したクラウス・クラハト、克美・タテノクラハト両氏による『クリスマス：どうやって日本に定着したか』（角川書店 1999年 東京）には、クリスマスは、早くは、日本人が初めてキリスト教、キリスト教文化に触れることになった戦国末期から織豊政権期にかけて、日本人信者やキリスト教を信仰、利用した一部の権力者およびその周辺の人々によって経験されていたこと、その後の徳川政権下におけるキリスト教禁止、キリシタンの弾圧によって細々と命脈を繋いだ長い期間を経て明治にはいると、文明開化の波に乗るように、キリスト教、外国人、外国文化と関わる様々な場において一部の日本人に再び経験されるようになったこと、やがて日露戦争の勝利を契機に一般大衆に急速に広まり、その流れが大正期には一段と強まったこと、そして、昭和に至り、日中全面戦争突入後、戦時体制ゆえの経済的、文化的、思想的に抑制、自粛状態におかれまたも世の中から消え去ることになったクリスマスが、戦後は一転して、GHQの占領政策と戦時体制、軍国主義からの解放を喜ぶ大衆によって「デモクラシーの祭り」と化し、あるいはマスメディアや商業主義、消費主義に煽られて通俗化し、あるいは家庭・職場・地域そして学校教育に浸透することで季節行事化が進んだこと、が示されている。

このように、日本におけるクリスマス受容史には、戦後の歴史に先立つ興味深い前史が存在し、それはまた中国におけるクリスマス受容史においても同様に想定可能なものであ

ろう。

4、中国におけるクリスマス受容史の研究

中国における近年のクリスマスの大流行に先立つクリスマス受容史に関しては、主に次のようなふたつの方向性を採って進められてきた研究の存在を指摘することができる。ひとつは、かつての中国社会におけるクリスマスの受容、定着を近代における西洋文化の流入によってもたらされた伝統的「節日文化」の改変、再編の文脈のなかに位置付け、考察するもの (A)。もうひとつは、特定の地域の文化が近代以降どのような変化を遂げてゆくことになったのかを探究する (従って、論述が現代まで及ぶこともある) 過程で、その地域におけるクリスマスの受容、定着に言及するものであり、特に、中国の近代を象徴する都市である上海を研究対象に据える場合にクリスマスは取り上げられることになるようである (B)。以下、それらについて、現在までのところ参照できた研究を列挙して置こう。

(A)

趙鳳玲「欧風美雨影響下中国近代節日的变革」(『鄭州大学学报(哲学社会科学版)』2007年第5期)

趙鳳玲「西俗東漸与近代中国節日的特点」(『中州学刊』2007年第6期)

李鳳鳳「西俗東漸之元旦慶賀——以《申報》報道為中心(1912—1928)」(『華中師範大学研究生学報』2010年第2期)

(B)

鄭土有「衝突・並存・交融・創新：上海民俗的形成与特点」(『中国民間文化』第3集[学林出版社 1991年 上海])

蔡豐明『上海都市民俗』(学林出版社 2001年 上海) 参、繁忙節慶 上海都市歲時節令民俗、(5) 滬上聖誕之夜

袁燮銘『上海中西交匯裏的歷史變遷』(上海辞書出版社 2007年 上海) 晚清上海歲時習俗之嬗變

耿光連主編『社会習俗變遷与近代中国』(濟南出版社 2009年 濟南) 第7章、近代歲時節日習俗的變遷、4、新節日的出現

さらに、(A) と (B) 双方の特徴を兼ね備えた以下のような研究もある。

趙翎「民国時期政府頒行的新式時序節日对江南市鎮的影響——以浙江烏鎮為個案的考察」(『三峡大学学报(人文社会科学版)』第30卷 2008年)

上掲の研究の発表年次が、いずれもごく近年に偏しているのは、私の調査が恣意的であったためではなく、近年の中国社会におけるクリスマスの大流行に由来する現象であると

考えられる。クリスマスが現代中国社会において年中行事と化し、娯楽や消費と結び付いて確固たる存在感を主張するようになったことに伴い、クリスマスに対する文化的、経済的、政治的関心が生じ、その結果として、この 10 年間に現代中国とクリスマスの関係を論じた研究が大量に著わされることになった。そうした研究動向の存在が中国におけるクリスマス受容史への関心にも繋がることになったのである。従って、現代中国社会とクリスマスの関係を論ずる研究においても過去のクリスマス受容の歴史が振り返られる場合がある。それらは、中国におけるクリスマス受容史を考えるうえでは当然参考にする価値を持つものであるし、また、この 10 年における中国人、中国社会とクリスマスの関係自体が極めて興味深いテーマであるので、以下に筆者が読むことができたもの達を列挙して置くことにしたい。

高丙中「聖誕節与中国的節日框架」(『民俗研究』1997 年第 2 期)

劉善齡「中国人的聖誕印象」(『尋根』2001 年第 6 期)

汪春英「聖誕節和春節的文化內涵」(『阜陽師範學院學報(社會科學版)』2002 年第 2 期)

楊根培「春節与聖誕節中的中西方文化習俗」(『長沙航空職業技術學院學報』2002 年第 4 期)

張承平、万偉珊「文化的普適与包容——中西傳統節日的文化差異与社会認同」(『長沙電力學院學報(社會科學版)』2002 年第 4 期)

陳夢雲「試論中国現代節日系統中的外来節日」(『臨滄教育學院學報』2004 年第 2 期)

蕭放主持、劉魁立、張勃、劉曉峰、周星「傳統節日与当代社会」(『民間文學論壇』2005 年第 3 期)

勞拉「“没文化”的聖誕節与傳統文化疲軟」(『中国社会導刊』2005 年第 3 期)

韓雷「構建他者——中国聖誕文化初探」(『北京航空航天大學學報(社會科學版)』2005 年第 4 期)

李朗「關於西方節日对大学生影響的調查分析——以清華大學為例」(『中国青年研究』2005 年第 5 期)

金昇霞「略談西方節日对中国傳統節日的衝擊」(『長江大學學報(社會科學版)』2005 年第 6 期)

寇福明「從洋節盛行看中西文化的融合」(『忻州師範學院學報』2006 年第 2 期)

黃鳴「從淡化洋節說開去」(『重慶職業技術學院學報』2006 年第 4 期)

虞卓「城市“洋節熱”背後的倫理及價值思考」(『遼寧行政學院學報』2006 年第 11 期)

王霄冰「文化記憶、傳統創新与節日遺產保護」(『中国人民大学學報』2007 年第 1 期)

譚文富「文化的民族性与文化的全球化」(『齊齊哈爾師範高等專科學校學報』2007 年第 1 期)

張偉佳「“洋節”流行的符号學解讀」(『南通紡織職業技術學院學報(綜合版)』2007 年第 2 期)

高丙中「包容看待複雜社会的複合文化」(『民間文學論壇』2007 年第 2 期)

黎天業「傳統節日儀式的德育價值研究」(『桂林師範高等專科學校學報』2007 年第 3 期)

王霄冰「節日：一種特殊的公共文化空間」(『河南社會科學』2007 年第 4 期)

王洪英「对“洋節”論争的思考」(『遼寧師範大學學報(社會科學版)』2008 年第 1 期)

- 舒開智「伝統節日、集体記憶与文化認同」(『天府新論』2008年第2期)
- 張羽、張彩霞「近十年台湾節日變遷与文化認同研究」(『厦門大學學報(哲学社会科学版)』2008年第5期)
- 趙美玲、趙以保「对“洋節”熱的思考」(『当代社科視野』2008年第6期)
- 劉國慶、周劍「高校校園“洋節熱”現象探析」(『科技信息』2008年第6期)
- 徐子昂、孫蓉「漫談西方外来節日的中国化改造——從年輕人熱衷洋節談起」(『当代青年研究』2009年第1期)
- 馮建民、許麗紅「從傳統節日看中西文化差異与交融」(『唐山職業技術學院學報』2009年第7期)
- 李巍「傳統節日法定化的文化闡釋」(『瀋陽大學學報』2009年第2期)
- 陳歆「從中国節日現狀看中西文化交流」(『天府新論』2009年6月)
- 王曉敏「淺談中国的西方節日熱」(『改革与開放』2009年6月)
- 陳麦池「跨文化視野中的我国傳統節日變遷」(『河南工業大學學報(社会科学版)』2009年第4期)
- 李麗敏「論西方文化衝擊下中国傳統節日的回帰」(『鷄西大學學報』2009年第4期)
- 高丙中「節日傳承与假日制度中的国家角色」(『紹興文理學院學報(哲学社会科学版)』2009年第5期)
- 王潔「傳統節日文化內涵与共有精神家園建設」(『學理論』2009年第22期)
- 張青「從跨文化視野看洋節的流行」(『湖北社会科学』2009年第9期)
- 李麗萍、張高遠「全球化背景下中国“聖誕熱”現象反思」(『南京財經大學學報』2010年第2期)
- 舒鵬飛、王安霞「聖誕節与春節的視覺符号及傳播」(『包裝工程』2010年第14期)

次節以下では、上掲の諸研究を参考にしつつ、新たに入手した資料を加え、現代中国のクリスマス大流行に先立つ中国人のクリスマス受容史を確認してゆくことにするが、従来の研究においては採り上げられてこなかった、かつてのクリスマスと中国人の関係の実際をリアルに教えてくれる貴重な資料のひとつである近代中国人の日記に見るクリスマスについて、これまで収集したその一端を紹介して本稿を終えようと思う。

注

1. 南堂の歴史に関しては、矢沢利彦『北京四天主堂物語 もう一つの北京案内記』(平河出版 1987年 東京)が詳細な情報を与えてくれる。
2. 『朝日新聞(東京本社版)』1972年8月21日夕刊の「北京のカトリック 自主独立を貫く」によれば、文革中の北京でもカトリックの信仰は維持されていたことが判る。

付録：近代中国人の日記に見るクリスマス

○蔡元培（1868－1940）

『蔡元培日記』

1937年12月25日 土曜 晴。耶教聖誕節。

【王世儒編『蔡元培日記（上下）』（北京大学出版社 2010年 北京）】

○魯迅（1881－1936）

『魯迅日記』

1917年12月25日 晴、大風。紀年日休飯。

1918年12月25日 晴。休飯。

1920年12月25日 晴。休飯。

1924年12月25日 晴。休飯。

1932年12月25日 星期。雨。上午長谷川君（三郎。内山書店雜誌部責任者）贈海嬰玩具摩托車一輛。

1933年12月24日 星期。晴。雜誌部長谷川君贈海嬰蛋糕一盒、玩具一種。

1934年12月23日 星期。小雨。午長谷川君贈蛋糕一合。

12月26日 雨。上午内山夫人贈海嬰玩具二種。

1935年12月21日 曇。上午鎌田夫人來、贈海嬰玩具一合、文具一合、紙製唱片二枚。

12月22日 星期。晴。上午内山君贈歲寒三友一盆。

12月24日 曇。内山夫人贈海嬰望遠鏡一具、晚長谷川君贈蛋糕一合。

【『魯迅全集』第15卷『日記』（人民文學出版社 1981年 北京）】

○胡適（1891－1962）

『胡適日記全集（胡適留學日記）』

十八、耶穌誕日詩（1913年12月26日）

昨日為耶穌誕日、今日戲作一詩記之。

耶穌誕日

冬青樹上明織炬、冬青樹下歡兒女、高歌頌神歌且舞。朝來阿母含笑語、兒輩馴好神佑汝、灶前懸襪青絲縷。神自突下今夜午、朱衣高冠鬚眉古。神之格思不可睹、早睡慎毋干神怒。明朝襪中實錫粒、有蠟作鼠紙作虎、夜來一一神所予。明日舉家作大酺、殺鷄大於一歲殺。

堆盤餚果難悉數、食終腹鼓不可俯。歡樂勿忘神之祐、上帝之子天下主。

此種詩但写風俗、不著一字之褒貶、當亦覘國者所許也。

1923年12月25日 ……今日為耶穌誕節、我們在西山旅館吃晚飯。

1926年12月25日 今天為「耶穌誕節」。早起立時、旅館中的侍女二人敲門、送進一杯葡萄酒、一片蛋糕、給我賀節。這是美國沒有的。到 Silcock 家過節。……

1928年12月25日

1933年12月25日

1935年12月25日 今天是基督教的聖誕節。

【曹伯言整理『胡適日記全集』(聯經出版事業 2004年 台北)】

○吳宓(1894—1981)

『吳宓日記』

1919年12月24日 陰。是日為 Christmas Eve、林君玉堂夫婦、約在其寓所晚飯、係制中國餐。宓購哈佻風景畫一冊、值一元、以贈林君夫婦、聊作節禮。

飯後、偕林君同赴本大學校長 President A. Lawrence Lowell 夫婦宅中之茶會、慶祝年節 Christmas Reception。到者學者約百人、由校長夫婦躬自款接、茶點極豐備。十時散會。

同 12月25日 陰。大雪。是日為 Christmas Day。午、偕陳、湯、顧諸君、赴 Imperial Restaurant 午飯。旋至顧君處少坐。

晚、仍偕陳、湯、顧諸君再往該處晚飯。飯後、赴校中青年會 Phillips Brooks House 之慶祝年節會。會序甚長、中有洪君深唱『打棍出箱』及『李陵碑』二劇。十一時散。

1920年12月24日 陰。明日為耶教年節。今日則西人之除夕也。

1925年12月25日 星期五 是日為耶穌聖誕、極為蕭索。

1927年12月25日 星期日 陰。下午微雪。星期。是日為耶穌聖誕節、本年更無樂趣。

【吳學昭整理校注『吳宓日記』(生活·讀書·新知三聯書店 1998年 北京)】

○顧頡剛(1893—1980)

『顧頡剛日記』(1913年より)

1923年12月25日 星期二(十一月十八 雲南倡義紀念日 耶穌聖誕節)

1925年12月25日 星期一(十一月初十 雲南起義紀念日 耶穌誕日)

1933年12月25日 星期一 今日聖誕、譚女士未來授課。

【俞國林編『顧頡剛日記』(全集版 中華書局 2011年 北京)】

○鄭振鐸(1898—1958)

『鄭振鐸日記全編』

1944年12月25日 晴。今天為聖誕節、而街頭寂寂、無歡樂之象。……六時、至舒處。

心緒鬱鬱、談至八時半、回。中途有警報。十時睡、夜有夢。

『同（訪問印度緬甸日記）』

1957年12月25日（星期六） 晴。昨夜是聖誕前夜。但似乎並不太熱鬧

【陳福康整理『鄭振鐸日記全編』（山西古籍出版社 2006年 太原）】

○蒲風（1911－1942）

『蒲風日記』

1931年12月26日 星期六 昨天是聖誕節、洋人們、照例有一番熱鬧。但在我、却正和中公告別、不用去說甚麼歡興、雖則事實上我也沒有甚麼悲戚。

【李文儒編『蒲風日記』（中國現代作家日記叢書第1輯 山西教育出版社 1998年 太原）】

